

平成二十六年 入学試験問題

国語

第二回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから六ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙の解答らんに入入してください。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(1) 社会的排除とは、かねてから言われてきた「貧困」と、どう違うのだろうか。

貧困が、生活水準を保つための資源の欠如を表すのに対し、社会的排除とは、社会における人の「位置」や、人と人との「関係」、人と社会との「関係」に関するものである。簡単に言えば、貧困とは「必要なモノやそれを得るための資源がない」ことであるが、社会的排除とは、「社会から追い出される」ことである。

社会から追い出されるといっても、ピンとこない読者の方も多いかもしれない。何から追い出されるのだろうか？

それは、制度や仕組みであり、人間関係であり、物理的な場所である。

A、会社をクビになることは、ただ単に給与がもらえなくなるだけの問題ではない。厚生年金や健康保険などの社会保険から脱落することを意味し、職場の同僚などの人間関係を失うことや、社宅などに住んでいれば住居さえも失うことにもつながる。

B、失業が長引けば、職場外の人間関係にも支障が出てくるかもしれない。学校の「ドウソウ会」で友人たちに会うことがつらくなったり、親戚の集まりに出にくくなったりする場合もある。社会的な孤立につながっていく危険性もある。うつ症状など心の健康にも影響が出てくるかもしれない。

失業期間が長くなれば長くなるほど、再雇用されることは難しくなり、貯蓄も底をつき、国民健康保険の保険料も払えなくなり、無保険となるかもしれない。再就職の面接に失敗すればするほど、自尊心が傷つけられ、「がんばろう」という気持ちさえも奪われていく。誰でも楽しめるはずの公共の場所、たとえば、スポーツ施設や図書館でさえ、行くことが恥ずかしくなる。これらはいくつかの例にすぎない。

このように労働市場から追い出され、社会の仕組みから脱落し、人間関係から遠ざかり、自尊心が失われ、徐々に社会から切り離されていくことが、「社会的排除」である。

「無縁社会」「孤族」などといった言葉が少し前に流行したが、「社会的排除」とは、ただ単に人が孤立していることを問題としているのではなく、社会が人を追い出していくさま、それを問題としているのである。

★包摂室が正式に発足する3週間前の2011年3月11日、東日本大震災が起きた。

何万という数の人々が、大切な家族を、恋人を、友人を、隣人を奪われ、家や職場を失った。その何倍もの人が、まだまだ凍てつき雪が積もる寒さの中、暖房や電気などの基本的なライフラインさえ確保されないまま何日も過ごした。かろうじて地震と津波の被害を免れた高齢者の中には、避難所に着いてから亡くなった方もおられた。

震災から半年を過ぎた今(2011年10月現在)となっても、被災者の方々の生活は厳しく、生活再建からはほど遠い。9月にNHKが行った調査では、仮設住宅に暮らす人の2人に1人が「収入が足りない」と答えている(2011年9月7日付調査)。生活再建といっても、勤めていた会社や取引先を失い、長年、苦勞と資金をつぎ込んだ田畑や工場、機材が跡形もなくなってしまう人も多い。

さらには、福島第一原発事故の影響ははかりしれなく、ハウシヤノウから子どもを守るため、家族バラバラの生活が続く人も少なくない。

震災に関するこのような悲惨なニュースが続く現在、震災前と同じように「貧困」や「社会的排除」の話をするのは、非常に困難になった。

私のようなこれらのテーマをセンモンとする研究者であっても、被災者以外の人々の「貧困」や「社会的排除」を訴えることは、少々はばかられる。「そんなこと、言っている場合かい！」とお叱りを受けそうな気がするからである。被災地以外の多くの人々は、自分がどのような状況に置かれていても、「被災地の方々の苦勞に比べれば、まだましだ」と感じているであろうし、「少々の苦勞はがまんしよう」と思うであろう。政策の観点からも、今はまず被災地の復興が「ユウセンされるべきである」という意見が強い。しかしそれは、結果的には、今回の大震災の被災者以外の困窮者ももちろんのこと、被災者の方々をも含めて、すべての人にとって(3)ことである。

なぜなら、今回の震災でも、以前の災害でも、これまでの日本の社会が抱えてきた貧困や格差についての構造的な問題が、大きく影響を及ぼしていると思われるからである。

そして、それにもかかわらず、人々の生活困難や苦惱を、自然災害による「いたしかたないもの」「想定外のもの」として受け止めてしまうことで、社会の構造的な問題＝理不尽な格差や貧困を生み出す仕組みや、人々を社会

の周縁に押しやる排除の構造、に注意がいなくなってしまうからである。

C、過去の災害、たとえば、阪神・淡路大震災や、アメリカのハリケーン・カトリナの経験から見ても、自然災害は、誰をも等しく襲うものではない。社会の中でのより底辺にある人々が、もつとも被害を受けやすく、被害ももつとも大きく、そして、災害からの生活再建ももつとも難しいのである。社会的弱者は、そのまま災害弱者と言ってもよい。

被災地においては誰も彼もがづらい状況にあり、そこでは災害前の貧富の差や地位の差は感じられないかもしれない。こういうとき、人々は強い連帯感で結ばれ、被災を免れた人々からは、被災者へ惜しみない支援が届けられる。

D、時間がたつにつれて、災害弱者とそうでない人々の格差は明らかになっていく。同じ災害にあっても、それに対処できる余力は人によって異なるからである。

貯蓄がある人、親戚や友人などの人的資源がある人、学歴やコネなどがある人などは、それらが無い人に比べて、同じ境遇に置かれてもそこから脱出することが比較的(ワ)ヨウイであろう。

もつとも懸念されるのは、高齢者、低所得者、障害者、病弱者、一人親世帯、女性、子ども、外国籍の方々などの社会的弱者である。

社会的弱者は、震災そのものの影響に対処する力が弱いうえに、震災から発生する二次的被害にもあいやすい。住み慣れた家を奪われての避難所や仮設住宅の生活は、とりわけ高齢者や病弱者、障害者にとっては過酷であり、先に述べたように、被災は免れた高齢者が避難後に亡くなったというケースも、次々に報告されている。

障害を持つ方々にとつても、避難所での生活は至難の(4)である。知的障害を持つ方が、急な環境の変化に対応できず、避難所の集団生活にも馴染めず、ご家族ともども車内で過ごさざるを得なかったという話も聞いている。

家を探すのも、仕事を探すのも、社会的弱者は大きい★ハンディを抱えている。これまでの生活が大変であったがゆえに、それを再建するのはさらに困難なのである。

被災地の外でも、社会的弱者はとりわけ災害弱者となりやすい。

たとえば、母子世帯の母親たちは、普段から労働市場において不利な立場に置かれているが、その立場ゆえに、震災による経済の影響による雇

止めや、失業の不安に怯えている。2008年のリーマン・ショック後の不況においても、真つ先に影響を被つたのは派遣労働者など、労働市場における弱者であった。

節電や財政難などのあおりを受け、今後、震災の二次的、三次的被害は、日本全国に波及していくであろう。被害が拡大し、長期化していく中、やはり、社会的弱者はいちばん心配な層である。阪神・淡路大震災では、震災後2年たつてから仮設住宅での孤独死が急増したことを覚えている読者も多いであろう。当時孤独な死を遂げられた方々も、ほとんどが、震災前から安定した生活基盤をもつていない貧困層であった。

私たちが認識しなければいけないのは、自然災害の影響はもろろん甚大であるものの、それを最終的な決定打とするのは、(5)社会の仕組みであるということである。

そもそも、社会が、すべての人が尊厳をもって、安心して暮らせるような仕組みとなつておらず、すべての人の安全網を準備していないからこそ、自然災害は自然の摂理を超える猛威をふるうことになるのである。自然災害、たとえば津波や干ばつの死者数や被害者数が発展途上国では多くて、先進諸国の例をそれほどきかないのは、先進諸国の方がさまざまな社会制度が整っており、どのようなことがあつても人々の暮らしを守る手立てが講じられているからである。倒産による失業も、災害による失業も、それらが人々の暮らしに与える影響を最小限に抑える手立てという観点からは同じである。

(阿部彩『弱者の居場所がない社会』)

問一

——(1)「社会的排除」とありますが、これはどういうことですか。解
答らんに合うように答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用い
ること)

人を(六十字以内)こと。

問二 — (2) 「貧困」^{ひんこん}とありますが、それはどのような状態ですか。二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを
用いること)

問三 (3) に入れるのにふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、
記号で答えなさい。
ア 必要な イ 不要な ウ 幸福な エ 不幸な

問四 (4) に入るひらがな二字の語を答えなさい。

問五 — (5) 「社会の仕組み」とありますが、本文全体を通して筆者は社会
の仕組みをどのような構造からどのような構造へ変える必要があると
主張していますか。九十字以内で説明しなさい。(句読点や記号も含
み、必ず一マスをを用いること)

問六 A ㄱ D ㄷ に入れるのにふさわしいものを次のア～エの中か
ら一つずつ選び、記号で答えなさい。
ア さらに イ しかし ウ そもそも エ たとえば

問七 — (ア) (オ) のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えな
さい。

- ア 一度大きな災害がおこってしまうと災害前にあつた貧富^{ひんぷ}の差や地
位の差はその後ずっと感じられなくなってしまう。
- イ 社会的弱者は災害そのものへの影響^{えいぎょう}に対処する力は他の人たちと
変わらないが、災害の二次的被害^{ひがい}にはあいやすい。
- ウ 災害後は何よりもまず被災地^{ひさいち}の復興に着手し、次に被災した人た
ちの生活再建を支援^{しえん}する制度を見直していくべきである。
- エ 災害の規模が大きくなればなるほどその被害が人々の暮らしに与^{あた}
える影響が大きくなってしまふとは限らない。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

アルバムの最後の一枚は、家族旅行の写真だった。小学四年生のゴールデンウィーク、香澄が亡くなる二ヶ月前に三人で軽井沢にいった。人も多かったが、それ以上にかわいい洋服を着た犬が目立つ町だった。香澄は飼いたい主たちに了解を得て心ゆくまで犬たちを撫でまわし、しまいには「あたいも飼いたい」とねだってきた。

弘美は「どうせ世話するのはおかあさんでしょう？」と渋り、返事を保留にした。あのとき真剣に検討し、すぐ犬を飼わなかったことが悔やまれてならない。香澄がその短い人生の中で出来たかもしれない経験(1)をいたずらに潰(つぶ)してしまったことが悔しくてならない。

道ゆく人にシャッターをお願いし、三人で写った最後の写真。弘美と和博に挟まれるようにして香澄が立っている。

一人っ子の香澄は、家族で写るといつも真ん中にきた。家族全員にとつて、それが当たり前だった。あまりに当たり前すぎて、その真ん中が欠けてしまうことなど想像も出来なかった。

香澄の身長はまだ弘美の肩までしかない。あまり背の高くない弘美は娘に身長を抜かれることを覚悟していたし、楽しみにもしていた。あと何年待てば抜いてくれるだろうか？ 考えても仕方のないことを考えてしまう。暑い日は喉が渴(かわ)いていないか、寒い日は風邪(かぜ)など引かぬか、案じてしまう。

我が子のことを想わぬ親がどこにいる？ 子どもがまだ幼いうちはもちろんのこと、生意気ざかりの子だって、**A** 自分の家庭を築いている子だって、そして、もう死んでしまっている子だって、親にとっては等しく我が子なのだ。

いつまでだつて想いつづける。当然ではないか。

アルバムはたくさんの空白のページを残して、**B** 終わっていた。和博と弘美、どちらからともなくため息が漏れる。和博がしずかに言った。

「いっしょに見れてよかった。最後の写真まで行き着けたの、今日がはじめてだよ」

弘美は和博を見つめる。いつも冷静な夫。その冷静さがときに冷酷すぎるように感じてきた二年間だった。彼が必死で押し殺した(2)★慟哭(どうく)に気づく余裕のない二年間だった。

「明日の卒業式、出席することにしたの。だから、よかったらあなた

も……」
弘美の誘いに、和博は蛍光灯の白い光の下でまぶしそうに目をしばたたく。

「いくよ。実はもう、有休もとつてある」

弘美はうなずき、香澄の片方だけの靴下と夏用のパジャマを拾いあげた。

「この部屋も、そろそろ片付けようと思う」

「……無理しないでいいぞ。ゆっくりでいいさ」

「うん。ゆっくり、でもちゃんと、片付ける」と噛みしめるように言つてから、弘美は和博の胸に頭をあずけた。

「時間を進めたからつて、香澄が遠ざかるわけじゃないよね？」

「当たり前だろ」と和博が弘美の肩を抱く。

「また、香澄のアルバムをいっしょに見よう。いっしょに思い出してあげよう、あの子のこと。それがきつとそばに、いるつてことなんだ」

未熟児の娘が生まれた日、不安と罪悪感で押しつぶされそうになつていた妻を励ました夫の姿がそこにあつた。共に『親』となつた男の、あたたかな笑顔(3)がそこにあつた。

翌日、弘美は和博といっしょに小学校の卒業式に出席した。上品な紺色のスーツは六年前の入学式の際にはりきつて新調したものだ。それきり着る機会もなく、今朝までクローゼットに吊るしてあつた。防虫カバーを外すと、六年前の春の空気がふわりと匂つた。

サイズが合っていないのは、この二年間で弘美の体重が五キロも落ちてしまつたせいだ。

卒業証書の授与(4)で春田香澄の名前が呼ばれ、弘美と和博をおどろかせた。香澄の卒業証書を求めて、真紀たちクラスメイトが天満先生といっしょに、校長に直談判(5)にいったというエピソードが当の校長から披露され、弘美は天満先生や真紀があれほど必死に出席を呼びかけてくれた理由を解した。香澄に代わつて和博が壇上(6)にあがると、ひととき大きな拍手が起こつた。きつと香澄にも聞こえたはずだ。

式は滞りなく進み、やがて卒業生退場(7)のときがやつて来た。パッヘルベルのカノンが流れるなか、めいめい卒業証書を手にした香澄のクラスメイ

トたちが進みます。

しかしその列は講堂の出口までまっすぐ伸びず、途中で折れ曲がった。香澄の卒業証書を抱いた弘美たち夫婦の前にやって来たのだ。

マイクの前に立った天満先生が、戸惑う夫婦に一礼して喋りだす。

「この二年間、一組の合言葉は『香澄さんが見てるよ』でした。生徒たちはそれぞれ香澄さんに胸を張って報告できるような自分なりの課題を成し遂げて、今日の卒業式を迎えました。春田さん、天国の香澄さんといっしょにどうか生徒たちの言葉を聞いてあげてください」

天満先生がマイクのスイッチを切ると、先頭の男の子が弘美と和博に頭を下げた。

「ぼくは校内マラソンを、今年やっと完走できました。ビリだったけど、最後まで走りました」

次の男の子は、卒業証書とは別の手に持った画用紙を見せてくれた。

「ぼくは、秋の美術展覧会で入選できました。春田さんといった最後の遠足を描いた絵です」

髪の毛の長い女の子が目を真っ赤に腫らしながら、「この二年間、一日も学校を休みませんでした」とささやいた。背の低い女の子が「給食を残しませんでした。牛乳もぜんぶ飲みました」と笑顔で教えてくれた。弘美はうなずき、握手し、手を叩きながら知る。子どもたちがみんな、ある日とつぜんこの世から消えた友達を想いながらがんばり、成長してくれたことを。

最後にベリーショート我真紀が近づき、両手で弘美の手を握りしめた。

「おばちゃん。あたし、泣かなかった。香澄のことをどだけ思い出して、学校では一度も泣かなかった。その代わり、笑ったの。香澄に心配かけないよう、いっぱい笑いました」

真紀の腕には水色のリボンが巻かれていた。弘美は「ありがとう」と泣き崩れる。

(4) みんなひどい、と弘美は思っていた。誰にも言わなかったけれど、ずっと思っていた。

香澄の葬式から一ヶ月もしないうちに「美容室はまだあけないの?」と聞いてきた近所の人たち。

C 足が遠のいた香澄のクラスメイトたち。子どもを亡くした親に「卒業式にいらしてください」と電話してくるかつての担任。その誘いを断ろうとすると「なんで?」とふしぎそうな顔をした夫。

そして、嬉しそりに楽しそりに未来を語る真紀ですらも。

香澄がいない日常を簡単に受け入れ、馴染んでいくみんなに納得がいかず、許せなかった。

しかし今、弘美はそれが自分のあさ(5)な思い込みだったことに気づく。苦勞もせず日常に戻った者など、誰もいなかった。弘美は被害者意識に凝り固まっていた自分の愚かさを知る。

「香澄を十歳のまま、あの日に置き去りにしてたのは、私だったのね……」

弘美がハンカチを探してポケットを探ると、何かが手に触れた。引っ張りだし、思わず声をあげる。

白っぽい、茶色く変色したものの、いろいろあるが、すべて桜の花びらだった。

六年前、一年生の香澄が、小学校前の坂道に降り積もった花びらで遊んでいた姿を思い出す。

まさか母親のスーツのポケットまで花びらだらけにしていたとはね。気づかなかつたよ。

弘美は微笑むと、D 立ち上がり、香澄が入学式でやったように桜吹雪をつくった。

「卒業おめでとう!」

時を超えた桜の花びらが、あの日香澄と共に入学し、今日卒業を迎えた子どもたちの頭上に舞い降りる。歓声が沸いた。香澄もきつとどこかで笑ってくれているはずだ。花びらを撒く弘美の手に力がこもった。

おめでとう。今日は君の卒業式。そして君を失った悲しみからの卒業式。本当におめでとう。

(名取佐和子『君の卒業式』)

★慟哭：ひどく悲しんで、はげしく泣くこと。

問一

——(1)「いたずらに潰してしまったこと」とありますが、これはどのようなことですか。四十字以内で具体的に説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問二

——(2)「この部屋も、そろそろ片付けようと思う」とありますが、弘美がそれまで香澄の部屋を片付けることができなかつたのはなぜですか。解答らんに合うように答えなさい。(句読点は含まない)

香澄のいない日常を受け入れることができず、部屋を片付けることは香澄のそばから (五字以内) ことになると考えていたから。

問三

——(3)「途中で折れ曲がった。」とありますが、それは何のためですか。六十五字以内で具体的に説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

——(4)「みんなひどい」とありますが、このときの弘美の心の中をもっともよく表現している一文を探し、最初の五字を書きなさい。(句読点は含まない)

問五

(5) に入れるのにふさわしいひらがな二字の語を答えなさい。

問六

——(6)「歓声」とありますが、「声」を使った次の一～五の慣用句の意味を後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 声をしのばせる
- 二 声はずむ
- 三 声をのむ
- 四 声を張り上げる
- 五 声を大にする

【意味】

- ア 力いっぱい大きな声をだす。
- イ おどろいたり感心したりして声がでなくなる。
- ウ うれしくて声がいきいきとしてくる。
- エ 声を小さくする。
- オ 伝えたいことを人々に強く話しかける。

問七

A ～ D に入れるのにふさわしいものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア あつという間に イ 唐突に ウ おもむろに エ すでに

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つを選び、記号で答えなさい。

ア 弘美は和博よりも深い悲しみを背負ったが、香澄の卒業式に出席し香澄のクラスメイトたちのおかげでその気持ちを整理することができた。

イ 弘美も和博もこの二年間深い悲しみをかかえていることをお互いはずっとわかりあっていたので、香澄の卒業式にもいっしょに出席することにした。

ウ 六年前に着たスーツを再び着た弘美はポケットの中に香澄が入れた桜の花びらがあったことに気づき、悲しみから卒業するためだけに桜吹雪をつくった。

エ 香澄の卒業式に出席した弘美は香澄を失った悲しみを乗り越え、これからは香澄のことを思いながら日常を前向きに生きていこうと決心した。

